

## 「認知症」の報道に接して

今朝の新聞、TVで、厚生労働省の検討会で「痴呆」の代替語を「認知症」とする方向が出されたとの報道があった。

「痴呆」という表現には蔑視的な意味が含まれ、「何も分からず、何もできない」との誤解を招きやすく、早期診断を妨げる一因になっていた等から、代替え表現の検討を進めていたようである。代替え案として、「認知障害」、「記憶障害」もあり、国民からの意見募集（6333件）では「認知障害」が一番多かったが、既に精神医学分野で使用されているので、見送られたよう。

かといって、「認知症」という表現から、どうした障害状況をいうのか、正直ピンとこない。そこで早速、手持ちの辞書で詮索した。

認知：物事をはっきり認める。（シチズンの電子辞書）

認知：事象についての知識をもつこと。広義には知覚を含めるが、狭義には感性に頼らずに推理・思考に基づいて事象の高次の性質をしる過程。（広辞苑・第三版）

認知：英語 cognition の語源はラテン語の cognoscere で、「知ること」という意味をもち、哲学的用語としては認識と訳される。この語源の意味は学術用語として認知の意味に受け入れられている。たとえば、「認知とは知ることであり、認識ともいう。知るためには知覚、記憶、学習、思考が必要であり、認知はそれらを必然的に含む。（有斐閣 心理学辞典：抜粋）

ウーン、分かるようでよく分からない（私も、認知症ということになるのかな？）。

いずれにしても、病名、症状名は、その人のもつ一つの属性を表しているに過ぎず、属性一つを取り上げてその人の存在を規定しがちな風潮は、何も「認知症」だけではない。

“ People with disabilities are people, first. ”（障害のある人たちは、障害者である以前に、まず人間である）と同様に、高齢者は、認知症云々の前に、歳を重ねてきた（高齢になった）一人の人間ということであろう。歳を重ねたということも、一つの属性に過ぎない。

要は、今の障害状況も含めて今をどう生きるかであり、そのために周り（家族、医学、福祉、等々）が、何をどう支援するかという観点こそが、治療、支援、援助等に大事なことのように思う。

（2004年11月20日 記）